

たより



第 20 号

平成 25 年度夏季教職員研修講座

【竹井先生を迎えて】（愛知教育大学教授）

コツがわかれば子どもが変わる！子どもが夢中になる 図画工作指導～子どもの絵のとらえ方と教師の役割～

8 月 20 日(火)、昨年度に引き続き竹井先生をお迎えし、小俣中学校の美術室・理科室を会場に図画工作・美術科の研修講座を開催しました。

当日、竹井先生は見たこともないような大きなスーツケースを引いてみえました。その中には、講座で使っていた道具がぎっしり！お会いすると同時に実技指導が楽しみになりました。



絵は何のためにかくのか？



竹井先生は、「絵を描くということは、すべての子どもの感性を豊かにするために行う行為である。」とおっしゃいました。だからこそ、指導者は子どもたちの感性の奥に進んでいかななくてはならないのです。前段で**感性には3つのはたらき**があると話されました。

感性は受け身ではなく積極的な力（能力）である。

感性の役割は、身の回りの世界を選択的に感じ、自らの世界を広げることにある。

<例> 風景写真：撮りたい情報を選択するのが感性。

感性は共感できる能力である。

感性は知性の土台である。



教育の中で感性が重視されるのは、感性そのものの大切さと同時に、それが知性の発達のための条件になるからなのです。「感性と知性は連動しています。感性がはく離れた知性ではいけないのです。」と竹井先生はきっぱりおっしゃいました。

子どもの表現(絵)が生まれる背景について

スクリーンに映し出されたのは、児童がかいた2枚のニワトリの絵です。片方の絵は羽や尻尾が赤や青黄色の幾つもの色で塗られており、表現としてはやや稚拙な感じがする作品（実際にその子が見たニワトリは真っ白だったそう）。もう片方は緻密な表現で羽の一枚一枚まで丁寧に塗った作品です。それぞれの表現（絵）にはそこに込められた思いがありました。色とりどりの色で塗られた前者は、ニワトリの足に足輪がきつくはめられてい

ることに気付いた作者が悲しい気持ちになって、ニワトリを励ましたいという思いできれいな色に塗ったということ。緻密な表現の后者は、飼育し共に過ごしてきたニワトリの絵を描きたいという思いの強さが写実性にすぐれた観察画になったというものです。どちらの絵も、生活の中から表現したいこと(内的な必然性)から生まれた絵です。先生は、「絵は言いたい思いや願いなど、経験の質にあわせて表現の形式(写実的に描く、装飾的に描く...)などが決まるのです。」と話されました。

子どもの表現(絵)の発達について

次に、子どもの絵の発達段階についてお話をうかがいました。

はじめての描画
 スクリブル(なぐりがき)...身体の発達とともに精いっぱい
 何でも表すことのできるマル(グルグルから閉じられたマルへ)
 頭足人表現
 レントゲン表現
 カタログ的表現
 基底線(線を引いて上下分ける)
 強調表現(子どもの思い・実際よりも見たものを大きく描く)
 図式的な表現
 経済的表現(クラスの全員を描くなど)
 展開表現(一つの面から見た表現の重なり)



子どもたちの絵には、発達とともに徐々に性差が現れはじめます。そして、自分の言いたいことを通して絵を描くようになります。支援する側に大切なのは、子どもたちに語らせながら、その子らしさをいかに出させるかです。

また、幼児の脳を育てるために、「ぬりえ」が有効であることも分かってきているそうです。キャラクターなどの特定なものでなくても、ぬりえに取り組むことで前頭連合野(前頭葉)が刺激されるというのです。

さらに教師は、子どもの表現を受け止めることを心がけなければなりません。竹井先生は、次の5つをまとめとして挙げられました。

子どもの思いや願いを受け止めること。
 造形表現の発達の意識をもつこと。
 描きたいものが描ける環境の保障をすること。
 (パスだけでなく、絵の具、色鉛筆、描画材の工夫...)
 技法への展開、題材などの工夫をすること。
 絵画表現から生まれる発展的課題への意識をもつこと。



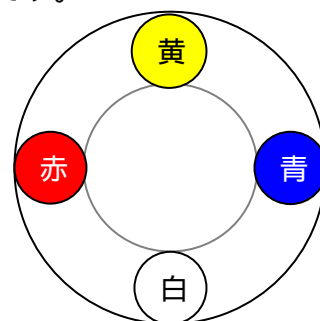
竹井先生には、講義の後に「混色指導」をテーマに実技指導をお願いしました。混色について理解していないと自分の求める色は出てきません。そこで取り組んだ内容は2つ。「おしゃれバッグをつくろう」と「マジカルジュースをつくろう」です。

【実技1】おしゃれバッグをつくろう

...混色を楽しみながら、オリジナルの紙バッグをつくる取組

絵の具(4色 黄・青・赤・白)を絵皿の縁に出す。
 紙皿の中央で混色し、綿棒に色を含ませ、500円玉くらいの大きさで、紙バッグに同じ大きさのマルを描いていく。
 できたバッグを交流し合う。

紙皿



【混色の豆知識】

文字どおり色と色を混ぜることで別の色をつくりだすこと。

三原色...混色によってあらゆる色をつくりだすことのできる3色のこと。色料と色光で色が異なります。

色料三原色：色料（インクや絵の具などのもととなる色）を混色するとき用いる3種類の色のこと。
緑みの青(C：シアン)・赤紫(M：マゼンダ)・黄(Y：イエロー)
色光三原色：色光（色のついた光）を混色するとき用いる3種類の色のこと。赤(R)・緑(G)・青(B)

減法混色

絵の具など色料の混色をいう。混ぜて得られた色の明るさがもとの色よりも暗くなる。（例：赤+黄 橙、黄+青 緑）

加法混色

色のついた光の混色をいう。混色するほどに明るさが増す。（例：赤+緑+青 白）

受講者の皆さんが、紙皿に染料や絵の具を載せて混色された作業は、減法混色です。

また、色をけんかさせずに調和させるには、下記の方法があると教えていただきました。

共通の色の友だちを加える（例：赤+紫 青+紫）
色のプレゼントをする（例：赤 青+赤）
お互いに色をやさしくする（例：赤+白 青+白）



淡い色合いの水玉が並んだバッグや、寒色系・暖色系の水玉バッグ、中には高級ブランドのようなマークを丁寧に描かれる先生も。

竹井先生も「声をかけるのも申し訳ないなあ。」とおっしゃるほど、先生方は夢中で作業されていました。短時間でしたが、作品交流も行いました。

【実技2】マジカルジュースをつくらう

...色遊びを意味付けし、言語化する取組

飲みたいと思うジュースをイメージする。
カップに食紅と水を1cmくらい入れて色水ジュースの原液をつくる。
色水を混ぜて、オリジナルのジュースをつくる。
ジュースに名前をつける。
ジュースの特徴を書く（発表する）。
飲むとどうなるかを書く（発表する）。
発表会（交流会）を開いて、発表し合う。



鮮やかなオレンジ系のおいしそうなジュースやとても飲めそうにない深い青緑のジュースなど、先生方の開発されたジュースは色とりどりでした。

「これはミステリージュースです。」「これを飲むと、性格が変わります。」

「これはパワフルジュースです。」「これを飲むと、元気がみなぎります。」のように、つくったオリジナルジュースの意味付けをして、発表していただきました。

みなさんととも生き生きしておられました。



みなさんのアンケートから

図画工作の授業においては、うまい絵を描かせようとするのではなく、子どもが絵に表そうとする世界や子どもの思い、工夫を大事にして、描く楽しさを味わわせたいという思いを改めてもちました。

子どもの絵の見方について、いろいろと教えていただき、勉強になりました。子どもの気持ちを大事にしなければいけないなあと思いました。実技は楽しかったです。夏バテ気味の身体と心がリフレッシュできました。

実技もあり、とても楽しかったです。子どもの作品の見方もとても勉強になりました。テーマを変えて、毎年でも竹井先生の講座を開いていただきたいです。

おしゃれバッグを自分が担当している図画工作でも取り組みたいと思いました。混色やパレットの使い方について、もう一度学習したいと思います。楽しかったです。

色づくりをして、三原色からいろんな色ができることを体験でき、とても楽しかったです。綿棒も図画工作の授業に使えるそうだなと思い、アイデアもいただき、今回学んだことを授業実践に生かしていきたいです。

講座会場であった小俣中学校の中学生の作品や、美術室の構成の仕方にも感心しました。9月以降の活動へのエネルギーをいただきました。

子どもたちの表現(絵)が生まれる背景をしっかりととらえることが大事だということがよくわかりました。また、子どもたちの絵に共感し、褒めることもとても大事だと感じました。実技については、混色の方法を改めて実習させていただき、薄い色から混ぜること、色料と色光の違いについても教えていただきました。マジカルジュースは子どもたちも楽しめそうなので、ぜひ実践したいと思いました。

表現は筆で塗るだけでなく、さまざまな表現方法があることがわかりました。子どもの思いや願いを自由に表現させ、受け止めることで、感性・知性の広がりにつながっていくのだらうと思います。かまえていた自分の指導法のあり方を見直すきっかけになりました。

「子どもが夢中になる」というテーマで、自分も夢中になって色づくりを楽しませてもらいました。また、マジカルジュースの言葉づくりも自分の作品への価値付けということでもよかったと思います。絵を描いた人の思い・考えにふれて評価するというのを9月から実践していきたいです。

前日の準備から、小俣中学校の先生方にはたいへんお世話になりました。また、当日の実技指導に加わっていただいた田垣教頭先生、稲向先生に心より感謝申し上げます。